



アコースティックバンド「テノヒラ」のボーカル 愛南町出身の kiku さんがつづるふるさとエッセイ

## — あいなん音故地新 — 「キャベツほどの世界」

新たな年度が始まって、環境が変わり、楽しく過ごしている人もいれば、そうじゃない人もおるやろう。子どものころはクラス替えがあるたび、担任の先生が変わるたび、期待と不安でドキドキした。あの頃は学校での出来事が自分の生活のほとんどで、学校で嫌なことがあればとことん落ち込んだし、いいことがあれば背中に羽が生えたみたいに浮かれた。私は男の子みたいにわんぱくやったから、学校に行くのをつらく感じたことはなかったけど、私の気付かんところでつらい思いをしとった友達がおったかもしれないあといまさら考えたりする。もし今そんな思いをしとる子がおったら世界の広さを伝えたい。お好み焼きに例えたら、あなたがおる世界はその中の一切れのキャベツほどもない。そして、今の環境に馴染めなくても落ち込まなくていいし、気にしなくていい。青色が好きな子が集まるとる中に白色が好きなあなたがおってもいいし、焼肉が好きな子ばかりの中にカツオが好きなあなたがおっていい。無理に嫌いなものを好きにならなくていい。そんなふりもしなくていい。どこかには白色好きやカツオ好きの世界がちゃんとある。そして、大人の私は住みたい世界は自分で選べる、っていうことを子どもたちに知ってもらえる生き方をしたい。

(テノヒラkiku)



本日！海日和！！ vol.126



## 「これでもサンゴ？ サンゴ！」



3月5日のサンゴの日から、愛南町に生息している変わったサンゴを紹介している。今回はクサビライシを紹介したい。

クサビライシは直径5センチメートルほどの大きさで、砂地の上にコロんと転がっている。形も変わっているが、一番の特徴は、自由に動けることだ。きっと、ヒトデやウニのように海底を這い回っているのだろう。多くのサンゴは、岩に固着して動けないので、異色中の異色のサンゴだ。

もう一つ変わっていることは、一つの固まりが一個体のサンゴということである。このようなサンゴを単体サンゴと呼んでいる。愛南町のシンボル、テーブルサンゴなどは、数ミリメートルのポリプが集まっている群体サンゴなので、一個体のサンゴとしては、異常な大きさとも言える。

名前のクサビラとは、古い言葉でキノコのこと



【クサビライシと骨格】

らしい。言われてみればキノコの笠の部分によく似ている。不思議なサンゴが数多く生息しているのも、愛南町の海の豊かさを象徴している。

(撮影地：瀬の浜)

愛南サンゴを守る会 西尾知照 ともてる